

平安期和文形容詞の活用と構文的性格についての一考察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1991-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 光浩 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1508

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



平安期和文形容詞の活用と 構文的性格についての一考察

吉 田 光 浩

一 はじめに

前稿「平安期和文形容詞の活用分析―因子分析の応用試論―」（『国語語彙史の研究―』和泉書院・1990）では、『枕草子』と『源氏物語』に用いられた形容詞の活用現象について、多変量解析の手法を用いた定量的分析を試みた。ここでは、そこで得られた分析結果について、それが別の資料（『榮花物語』）にもあてはまる客観的現象であることを確認しつつ、平安期形容詞の意味の類型と構文的性格、そして活用現象との関連について、若干の整理を試みておきたい。したがって、前稿を併せ、参照して頂くことができれば幸いである。

二 形容詞の活用パターンと意味の類型

前稿では、まず、『枕草子』に用いられた形容詞のうち、活用形 \wedge 語幹形⁽¹⁾・ --- (シ)ク形⁽²⁾・ --- シ形 --- (シ)キ形 --- (シ)ケレ形 \vee の総使用度数が、一〇を越えるもの（六七語）を選び出して、これらの語について、『枕草子』『源氏物語』の活

平安期和文形容詞の活用と構文的性格についての一考察

用形の使用度数表と活用形の出現比率を表わす表を作成した。そして、このデータをもとに多変量解析の一手法である因子分析法（主因子法）を用い、おのおのの形容詞がもつ各活用形の出現比率の異なりをグラフに表わすことによって、兩作品の主な形容詞の活用形出現パターンのありかたについて考察した。その分析結果の概略をここに述べておく。

I 『枕草子』と『源氏物語』に用いられた六七語の形容詞の平均的な活用形出現パターンは、次のように一(シ)ク形と一(シ)キ形に偏重する。

表一 『枕草子』『源氏物語』主要形容詞各活用形の平均出現率

作	品	語幹形	一(シ)ク形	一(シ)形	一(シ)キ形	一(シ)ケレ形
枕草子(%)		1.1	39.5	18.5	35.8	5.1
源氏物語(%)		1.4	47.6	8.9	37.9	4.2

(前稿『平安期和文形容詞の活用分析』より抜粋)

II 各活用形の出現比率の間には、おおむね『枕草子』『源氏物語』に共通する次のような相関関係がみられる。

1 一(シ)形(終止形)と一(シ)ケレ形(已然形)間は正の相関にある。(一(シ)形の出現率が高い語は、比較的一(シ)ケレ形の出現率も高く、逆に一(シ)形の出現率が低い語は、一(シ)ケレ形の出現率も低いという関係がみられる)

2 一(シ)ク形(連用形)と一(シ)形間、一(シ)キ形(連体形)と一(シ)形間、一(シ)ク形と一(シ)キ形間、各々いずれも負の相関にある。(各組の一方の出現率が高い語は、逆にもう片方の出現率が低いという関係がみられる)

III 『枕草子』と『源氏物語』の形容詞各語ごとの活用形出現比率のばらつきをもたらしと思われるもっとも大きなふたつの要因は、①各語が述部指向性をどの程度もつか、②各語が連用と連体の装定のうちいずれの性質を強くもつか、というものであると仮定できるのではないか。(ただし、『枕草子』では、①の要因のほうが②よりもばらつき全体に対

IV する説明力が若干大きく、『源氏物語』では②の要因のほうが①よりも若干説明力が大きいという異なりがみられる。)

形容詞の各活用形の出現比率のありかたは、語によって、各々かなりの違いがみとめられるが、その相違は、無統一・恣意的状況にあるのではない。すなわち、『枕草子』『源氏物語』ともに、むしろ互いに意味上共通するところの多い形容詞は、グラフ(前稿グラフ—2)上でも互いに集中して現われて、各活用形の出現比率の高低が比較的近似した、次のようなパターンをもつ。

1 「あかし(赤)」「あをし」「くろし(黒)」「しろし(白)」「こし(濃)」など、色彩や色相を表わす一群の形容詞は—(シ)キ形がもっとも現われやすく、次に—(シ)ク形が用いられやすい。そして、それ以外の活用形ではほとんど用いられないという出現パターンをもつ傾向がみられる。(以下においてこのようなパターンを「—(シ)キ形指向型」の活用パターンと呼ぶことにする)

2 「いたし(甚)」「いみじ」のように程度を規定することに用いられる形容詞は、—(シ)ク形が非常に多く現われ、それ以外の活用形はあまり多く現われない傾向がみられる。(—(シ)ク形卓越型)の活用パターンと称する)

3 「とし(疾)」「はやし」「ひさし」など時間的な量を表わすことに関わる形容詞は、—(シ)ク形が非常に多く用いられる傾向がみられる。(—(シ)ク形卓越型)ただし、「おそし」は時間量表現に関わる語であるが、独自の係り結び的慣用構文(くやおそき)で用いられる傾向があるなど、これらの語とは活用形出現パターンを異にする。

4 「たかし」「ちかし」「ちひさし」「とほし」「ながし」「ひろし」「ぶかし」「ほそし」「みじかし」など、空間的な量を表わすことに用いられる形容詞は、—(シ)キ形指向型と—(シ)ク形卓越型の形容詞の中間的な活用パターンを示す傾向がある。すなわち、—(シ)ク形と—(シ)キ形が多く用いられ、それ以外の活用形はあまり多く現われない傾向がみられる。(—(シ)ク形・—(シ)キ形型)と称する)

5 「いとほし」「うれし」「くちをし」「くるし」「こころうし」「にくし」「ねたし」「はづかし」「わびし」など人間に代

表される有情の存在の感情を表現することに用いられる形容詞は、どの活用形でも用いられるが、とりわけ—シ形（終止形）・—（シ）ケレ形（已然形）で現われる割合が考察—（表—）の平均値よりも高い傾向がみられる。（—シ形・—（シ）ケレ形指向型）と称する）

6 「あつし」「さむし」の二語は感覚を表わすことに用いられる形容詞であるが、若干—（シ）キ形に偏る徴候があるものの、用例が少なく、はっきりした傾向はつかめなかった。

前稿では、『枕草子』『源氏物語』を資料として、以上のような分析結果を得たが、このうち、考察Ⅳの1～6のなかで、それぞれ例として挙げた形容詞は、調査対象の形容詞六七語のうち、いずれもある種の意味のグループを代表する典型的な語であると考えられる。このほかに、同様のグループを形成すると考えられるものに、比較的抽象度の高い評価を表わす形容詞である「よし」「あし」「よろし」「わろし」などがみられる。これらの語は前稿においても調査の対象としたが、グラフでは全般に広く分散して現われ、一定の活用パターンがつかめなかった。

したがって、前稿で1から6のように考察した形容詞に、これら「よし」「あし」などを加えて、仮に次のように7種類の形容詞の類型を考え、それらと活用パターンとの関係を示しておくことにする。³⁾

形容詞の類型

活用パターン

- 1 色彩・色相形容詞
（—（シ）キ形指向型）
- 2 程度規定の形容詞
（—（シ）ク形卓越型）
- 3 時間を表わす形容詞
（—（シ）ク形卓越型）
- 4 次元形容詞
（—（シ）ク形・—（シ）キ形型）
- 5 感情形容詞
（—シ形・—（シ）ケレ形指向型）

6 感覚形容詞

(パターン不明)

7 評価形容詞

(パターン不明)

もちろん、これらのグループに属する語が、そのグループ名にふさわしくない用法で用いられることもあるが、ここでは、古代形容詞の類型の概略的な把握を試みるために、とりあえず、その問題は、考慮の外におくことにする。また、平安期の和文に多くみられる「をかし」「めでたし」「みぐるし」など対象を情意的に捉えて評価することに多く用いられる語は、「5 感情形容詞」と「7 評価形容詞」の双方に近い性格をもつものと考えられるため、とりあえず今回は考察の対象としない。

ところで、このような活用パターンのあり方と形容詞の意味の類型を結びつけて考えるという方法には、少なくともふたつの大きな問題がある。ひとつは、このような現象が、『枕草子』『源氏物語』の両作品にのみ観察されうるものであって、他資料への普遍化は難しいのではないかという問題であり、もうひとつは、活用形の現われる量と意味の問題とを結び付けることは、短絡的であって、方法的に飛躍があるという問題である。

第一の問題については、他の作品でも同様の調査を行なうことによって確認できるものである。また、第二の問題については、活用形の出現量と意味との間に、密接な関係がみとめられた前稿での分析の結果をもとに活用現象と語の意味との距離を、今後、どのように埋めてゆくかを考えてゆくべきであろう。したがって、本稿では、まず第一の問題に対応するために、以下の部分において、活用形の出現比率をパターン化することのできる上記の「1 色彩・色相形容詞」から「5 感情形容詞」までの各語群について、『栄花物語』の形容詞の活用形の出現量を簡単に調査しつつ、第二の問題について考える手がかりを求めするために形容詞の意味と構文的性格の類型について、若干の整理を試みておく。なお、「6 感覚形容詞」と「7 評価形容詞」については、いずれ稿を改めて検討したい。

三 『栄花物語』の形容詞の活用パターン

ここでは、1色彩・色相形容詞から5感情形容詞までの語群について『枕草子』『源氏物語』の両作品にみとめられた活用パターンが、平安期の他の和文資料にも広く観察されることを確認するために、同じく、平安期の女流仮名資料のなかから比較的まとまった分量の形容詞を見出すことのできる『栄花物語』を資料として、上記の1から5のなかで考察した語について、活用形の出現状況の簡単な調査を試みた後に、いわゆる対象語(句)と形容詞との基本的な構文上の関係について整理しておく⁽⁴⁾。ただし、ここでは、前稿で行なったような多変量解析の手法は用いないで、簡単に使用度数のみの検討に留める。なお、テキストには、日本古典文学大系『栄花物語上・下』(岩波書店・1965)を用いた。

1 色彩・色相形容詞

『栄花物語』における色彩・色相形容詞の各活用形の出現状況は、次表のとおりである。

表1-1 『栄花物語』色彩・色相形容詞活用形使用度数表(使用度数・総使用度数)

形容詞	語幹形	一(シ)ク形	一シ形	一(シ)キ形	一(シ)ケレ形	総使用度数
あかし(赤)	0	0	0	0	0	0
あをし	0	0	0	0	0	0
くろし	0	0	0	0	0	0
しろし	0	0	0	0	0	0
	0	0	0	0	0	0
	17	6	2	6	6	68
	0	0	0	0	0	33
	51	27	9	16	11	111
	0	0	0	0	0	22
	0	0	0	0	0	17

注：アミ部分は、『枕草子』『源氏物語』において、当該活用形の出現率が平均（考察Ⅰ）よりも高い部分であったことを示す

注：語幹形は、感動詞「あな」と共起した場合の用例数であり、助詞「の」「ながら」などを下接している例は含まない

注：一（シ）ク形と一（シ）キ形は、各々音便形を含む

注：一（シ）形はシク活用の語幹形を含まない

注：カリ活用は、省略する

（以下、注はいずれの表においても同様であるので省略する）

形容詞は、述定よりも装定にその本質があるために、基本的には文末述語として用いられにくい性質をもつものと考えられる。とりわけ色彩・色相形容詞はそのような性格をもっとも強く内在させている語群であるといえる。『栄花物語』においても、これらの形容詞には、一（シ）キ形が多く現われやすく、次に一（シ）ク形が用いられやすい傾向をもつが、一（シ）形や一（シ）ケレ形のように述語としての性格が比較的強い活用形が現われにくく、「一（シ）キ形指向型」のパターンをもつ形容詞群であるという考察Ⅳ・Ⅰの原則を、そのままあてはめることができる。

これらの形容詞がこのような一（シ）キ形指向型の活用パターンをもつ原因のひとつには、その属性の主体に視覚的に捉えることのできる実体的な「モノ」をとりやすく、それが名詞として文中に現れやすいということを挙げることができるであろう。すなわち、形容詞が連体のはたらきで名詞と関係を結ぶ用例が非常に多く観察されるのである。

①御車の後に殿上人引き連れて、色く様くにて、あかき扇をひろめかし使ひて、（巻第八 はつはな）

また、このほかに、次例のような、一（シ）キ形による準体用法で用いられやすいという性格がこれらの形容詞にみられることも、このような活用パターンをもつ原因のひとつとして考えられる。

②紅の濃き薄き、紫・山吹・青き・蘇芳など、皆二人づゝなり。（巻第三一 殿上の花見）

2 程度規定の形容詞

これらの形容詞は、ある事柄の程度を規定することに用いられることが多く、それゆえ、その判断の対象には、色彩・

色形容詞の場合のような実体をもつ「モノ」ではなく、「主語—述語」体制を、顕在的あるいは潜在的にもつ句構造に
表12・2 『栄花物語』程度規定の形容詞活用形使用度数表(使用度数・総使用度数)

形容詞	語幹形	—(シ)ク形	—シ形	—(シ)キ形	—(シ)ケレ形	総使用度数
いたし(甚)	19 0	1042 44	75 0	247 0	16 0	1399 44
いみじ						

分析されうる「コト」をとりやすい。しかも、全体的な割合から言えば、これらの形容詞自体が文末の述語用言として用いられることは少なく、その対象となる「主—述」体制の述語部分に—(シ)ク形のかたちでかかる構造で用いられやすい傾向がみとめられる。

③ 兵衛督又の日失せ給にけり。女御(筆者注・元子)いと^主いみじうおぼし^述惑ひたり。(巻第一六 もとのしづく)

④ 辰の時ばかりに、子持の御前(筆者注・尚侍嬉子)いたう^主ちあくばせ給て、(巻第二六 楚王のゆめ)

③は、「女御ガ悲シミ乱レ惑ウ」コト(様子)を、また、④は、「子持ノ御前ガアクビヲナサル」コト(様子)を、それぞれ判断の対象として、その程度を規定している例である。いずれも主—述に分析することができる対象の述語部分に対する連用のかたちで用いられている例である。これらは、通例、副詞用法と説明されるものであり、とりわけ「いたし(甚)」はこの用法で用いられることが多いようであるが、「いみじ」は、—(シ)ク形に偏りながらも、若干、広く他の活用形の利用例をもつ傾向が、『枕草子』『源氏物語』を含む三作品に共通する現象としてみとめられる。これは、「いみじ」が感情表現の形容詞としても用いられることと関係があるものと推察される。

3 時間量を表す形容詞

時間的な量を表す形容詞のほとんどが—(シ)ク形卓越型の活用パターンをもつという考察Ⅳ・3の原則は、『栄花物

語」にもあてはまることを、次表で確認することができる。

表1・2・3 『栄花物語』時間量形容詞活用形使用度数表（使用度数・総使用度数）

形容詞	語幹形	―(シ)ク形	―シ形	―(シ)キ形	―(シ)ケレ形	総使用度数
おそし とし(疾) はやし ひさし	0 0 0 0	32 11 43 5	2 0 0 4	9 1 1 2	1 0 0 0	44 12 44 11

これらの形容詞は、やはり、程度規定に用いられるものと同じく、句構造に分析されうる事柄をその判断の対象として、その事柄の成立に関わる物理的、心理的な時間の量(永さ)を表わすものであると考えられる。したがって、このような活用パターンをもつ原因のひとつは、程度規定を表す形容詞の場合と同様に、これらの形容詞が自ら述語となるはたらきが弱く、句構造をとる対象の述語部分に―(シ)ク形でかかる形で用いられることが多いところにあるに求められるものと思われる。

⑥みかど主申物は、一度はのどかに、一度はとく下りさせ給述ふといふことも、必ずあるべき事に申思へるに、

(巻第一 月の宴)

⑦世中いと騒しう心閑ならぬに、関白殿主春よりひさしく悩みわたらせ給述に、(巻第三五 くものふるまひ)

⑥と⑦、いづれについても、「帝方讓位ナサル」「関白殿ガ、ゴ病氣ニナル」という主―述の句構造を「とく」「ひさしく」がそれぞれの述語部分にかかる形で、判断の対象としていることがわかる。

このような対象部分は必ずしも文現象上に顕在するものとは限らない。

⑧一条の宮には、御前の桜のおそき事を、御前よりはじめ奉り、心もとながり宜はすれば、(巻第一四 あさみどり)

⑧は、「おそし」が―キ形をとり、体言「事」にかかる例であるが、「おそき」が実質的に判断の対象とする内容は、「桜

「咲ク」コトであり、「咲ク」は文の現象下に潜在する。これは、「おそき桜」のように実体をもつ語にかかる場合についても同様に考えることができる。

ただし、考察Ⅳ・3でも述べたように「おそし」については、これらの形容詞の中では特異な活用パターンをもつようである。

⑩ 昼つ方中将殿より「夕暮れは待遠にのみ思ほえていかで心のまづはくゆらん」かうて暮るよやおそきとおはしたれば、(巻第一四 あさみどり)

⑪ 大殿いみじう興ぜさせ給て、「おそし／＼」と仰せらるれば、(巻第三 さま／＼のよろこび)

前稿で調査した『枕草子』『源氏物語』のみならず、『栄花物語』においても、⑩のように係助詞「ヤ」に応ずる結びとなる例、およびーシ形の用例をもつことなど、少なくともこれら三資料から判断する限り、述定的なはたらきを、比較的強くもつ形容詞であるといえることができる。

4 次元形容詞

表1-2-4 『栄花物語』次元形容詞活用形使用度数表(使用度数・総使用度数)

形容詞	語幹形	ー(シ)ク形	ーシ形	ー(シ)キ形	ー(シ)ケレ形	総使用度数
たかし	0	12	0	11	0	23
ちかし	0	68	2	18	2	90
ちひさし	0	8	0	0	0	8
とほし	0	7	2	8	0	17
ながし	0	31	3	17	1	52
ひろし	0	8	0	13	0	21
ふかし	0	32	3	17	0	52
ほそし	0	4	0	1	0	5
みじかし	0	3	1	9	0	13

『枕草子』『源氏物語』では、これらの形容詞は、一シ形の用例が、あまりみられなかつたようである。『榮花物語』では、「ちかし」（九〇例中二例）、「とほし」（一七例中二例）、「ながし」（五二例中三例）、「ふかし」（五二例中三例）などに若干ながら、一シ形の用例をもつ傾向がみられるが、いずれも二、三例であり、出現率に換算した場合に「とほし」が若干問題のある数値を示すものの、やはり上述の考察Ⅳ・4の原則を大きく逸脱するものとは言えない。

これらは、次の例のように具体的なモノを対象として、空間のなかに位置付けられる外延量を表すことに用いられることが多い。したがって、その判断の対象となる語は、色彩・色相形容詞のように名詞の形で現われやすい傾向をもち、文構造上では連体のはたらきでその対象となる名詞と関係を結ぶ例が多くみられる。

⑫この山の頂を平げさせ給て、高き石をば削り、短き所をば埋めさせなどして、やがて三昧堂を建てさせ給ふ。

（巻第一五 うたがひ）

⑬菖蒲を皆打ちて、やがて菖蒲の唐衣、葉玉など付けて、ながき根をやがて御前の御簾の前の遣水に浸して出で居たるもおかし。（巻三四 暮まつほし）

しかしながら、これらの語は、このような現実の空間量の把握に関わる意味のほかに、「ながし」「とほし」「ちかし」のように、時間量表現と交渉をもつもの（⑭⑮）や、「ふかし」のように、むしろ空間把握よりも、抽象的、心理的な事柄についての判断として用いられる傾向が強い語（⑯⑰⑱）もみられる。

⑭世の燈火消えさせ給ぬれば、長き夜の闇をたどる人、いくそばくかはある。（巻第三〇 つるのはやし）

⑮唐国までに祈り申けりと見えさせ給御仲らひにてこそおはしますめれば、かゝる世を遠くも近くも見奉る人さへ、皆唐国の人に祈られたる心地なんしけるとぞ。（巻第一七 おむがく）

⑯春ふかくなるまゝに、齋院渡らせ給べき年にて、心ことにおぼしめし急がせ給。（巻第三二 殿上の花見）

⑰宮御方の女房のなりども常だにあるに、まいてもの鮮に薫ふかきも理と見えたり。(巻第二一 つほみ花)

⑱御匣殿、御年はいと若けれど御心ふかくよろづをおぼしたる程も、いとあはれに、行末推し量られさせ給て見えさせ給。(巻第二一 後くゐの大將)

このように、時間量に関わることや抽象的な事柄を対象とする傾向と、実体的なモノを対象とする傾向が、原因のひとつとなって色彩・色相形容詞と程度規定、時間量を表す形容詞との中間的な活用パターンを示したものと考えられる。

5 感情形容詞

『枕草子』『源氏物語』を資料とした考察Ⅳ・5では、感情形容詞群は、―シ形・―(シ)ケレ形が他の形容詞群よりも多く現われる傾向がみられた。『栄花物語』の場合には「にくし」「ねたし」などのように―シ形をもたない語もみられ

表―2・5 『栄花物語』感情形容詞活用形使用度数表(使用度数・総使用度数)

形容詞	語幹形	―(シ)ク形	―シ形	―(シ)キ形	―(シ)ケレ形	総使用度数
いとほし	0	7	5	2	0	14
うれし	2	37	4	11	3	57
おそろし	1	1	0	0	0	2
くちをし	0	43	24	36	2	106
くるし	1	56	1	3	3	63
こころうし	0	81	13	36	4	135
にくし	1	46	14	30	11	102
ねたし	5	64	16	48	1	134
はづかし	0	20	1	12	1	34
わびし						

るが、他の形容詞群と比較すると、全般的には、広く―ン形が用いられているといえる。また、―(シ)ケレ形に関しては、他の形容詞群との比較のうえでは、さほど使用度数が高いとは言えないようである。ただ、語幹形などを含めて、全般的に広い範囲の活用形で用いられる傾向がみられることなど、考察Ⅳ・5に一致するところも大きい。

感情形容詞の判断の対象のとりかたについては、既にいくつか論稿がみられる。ここでは、詳しい考察を別の機会に譲ることとして、おおまかな構図について考えておきたい。感情形容詞の対象のとりかたは、基本的には程度規定の形容詞や時間量を表わす形容詞と同じく、主―述に分析されうる「コト」である場合が多いようである。⁽⁶⁾しかしながら、判断の対象部分と形容詞との構文的な位置関係からみると、感情形容詞の場合には、条件句や活用語の連体形などの形式をとる判断の対象部分を受けて、自らが文末述語の位置にたちやすい傾向をもつという点でそれらの形容詞群とは、異なる構文的性格をもつといえるであろう。⁽⁷⁾

⑱ まことかの押い籠められし有国、この頃宰相までなさせ給へれば、あはれにうれし(巻第四 みはてぬゆめ)
⑳ 宮の内の事はさる物にて、四方の山く寺く、数を尽くす御祈験見えぬ、いと心うれし。
(巻第二九 たまのかざり)

このような感情形容詞の述定的傾向は、単に―ン形態にのみ観察される現象ではなく、―(シ)キ形、―(シ)ケレ形の用例のなかにもみられ、係り結びを構成する文の述語用言として用いられている場合が他の形容詞群の場合より多く見出されることから確認することができる。

㉑ 内の女房十人馬にて仕うまつるこそ、いかに頭証にわりなからんといとほしけれ。

(巻第三三 きるはわびしとなげく女房)

㉒ たゞいかにもく心ざしの限り仕うまつりべかんめるなんうれしき。(巻第二六 楚王のゆめ)

とりわけ、感情形容詞が他の形容詞よりも―(シ)ケレ形で用いられやすい傾向がみられるその原因のひとつに、このよ

うな、係助詞「コン」に応ずる終止用法として現われる例が多いことを挙げる事ができるであらう。

また、これらの形容詞に、語幹形による次のような例が多いことも感情形容詞が終止述定のはたらきを、比較的強くもつことの傍証になるものと考えられる。

㊸「さればこそ、是や稚き人。七十の翁の云うことをかくの給よな。あなはずかしや」(巻六 かぶやく藤壺)

このように、感情形容詞は、比較的述語用言として用いられる傾向が強いという点において、上記のいずれの形容詞群にも認められない特質をもつものと考えることができる。

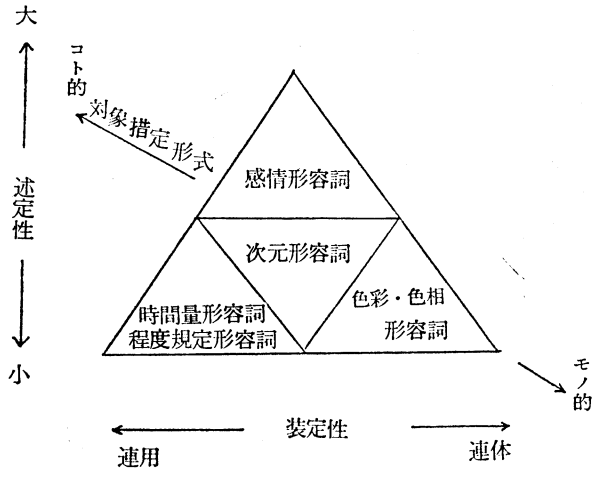
四 おわりに

以上、前稿の分析結果をもとに、『栄花物語』を用いて活用パターンの客観性を確認しつつ、五つの形容詞群について、判断の対象のとりかたを手掛かりに、極めて粗く構文的性格の図式を描いてみた。それらの結果を総合すると、平安期の和文に用いられる形容詞には、色彩・色相形容詞のように措定された対象に対して連体のはたらきで現われることの多いものと、程度規定・時間量などを表す形容詞のように、措定された対象が句構造(主―述体制)をもつ「コト」の場合が多く、その対象の述語部分に連用のはたらきで現われることの多いもの、およびこれら両者の中間的性質をもつ次元形容詞、そして、句構造をもつ対象をとりながら、自ら文末の述語用言として現われる傾向をもつ感情形容詞という構文的な現われ方の異なりがみられた。

したがって、従来、意味の面からしばしば考えられて来たような、主観―客観の二極対立構造とは別に、構文的には、判断のありかたと形容詞との関係をもとに、連用的機能に卓越するか、連体的機能を指向するかという装定性のありかたと、述部指向の性質をもつか、あるいは非述部指向の性質をもつかという述定性のありかたというふたつの観点から分析する

ことが可能となり、少なくとも、全体を次の図1のような三極鼎立構造として捉えることができるのではないかと考えられる。そして、更にここに感覚形容詞と評価形容詞をどのように位置付けるかを今後、考える必要が生ずるであろう。

(図一)



(1) 語幹形については他の品詞との識別が困難なものもみられるため、ここでは感動詞「あな」と共起して終止する例のみを対象とした。

(2) 一(シ)ク形・一(シ)キ形は、各々音便形を含む。

(3) 前稿では、「なし」も調査の対象とした。この語については、『枕草子』『源氏物語』において、いずれも、調査
平安期和文形容詞の活用と構文的性格についての一考察

形容詞全体の平均的比率に、幾分近い活用パターンを示す傾向がみられるが、これは、形容詞のなかで特異な性格をもつ語であるので、別稿に譲ることにする。

- (4) 川端善明「用言」(岩波講座『日本語6文法1』1976)には、形容詞の意味と構文についての分析がみられる。
 (5) 西尾寅弥「形容詞性述語の史的展開」(講座日本語学2)では、万葉集を資料とした感情形容詞の対象のとりかたと構文について述べられている。

(6) 既に指摘がみられるように、感情を表わす形容詞の場合でも実体的な名詞を対象とした例もみられる。

- 大殿「それげに候ふべき事なれど、すべて行幸はおぼしかけ給ふべきにあらず。御もののけいとおそろし。」
 (巻第一〇 ひかげのかづら)
 (7) もちろん、次例のように感情形容詞が判断の対象に先行する構文も可能である。

殿「くちをしうみだけ精進を今年はじめずなりぬる事」とおぼしめして、(巻第八 はつはな)

△参考文献▽

- 東辻保和「古典語感情形容詞の一視点」(『文学・語学』56) 1970・6
 西尾寅弥「形容詞の意味・用法の記述的研究」1972・秀英出版
 川端善明「用言」(岩波講座『日本語6文法1』) 1976・岩波書店
 宮地敦子『心身語彙の史的研究』1979・明治書院
 西尾光雄「源氏物語の形容詞について」(『東京女子大学日本文学』51) 1979・2
 西尾寅弥「形容詞性述語の史的展開」(『講座日本語学2』) 1982・明治書院
 平澤洋一「枕草子と情緒性の意味素性」(『国語語彙史の研究7』) 1986・和泉書院
 佐藤定義『棠花物語の文法的研究』1988・明治書院
 吉田光浩「主成分分析法による形容詞の活用分析」『枕草子』を資料として(『大妻国文21』) 1990・3
 吉田光浩「平安期和文形詞の活用分析」因子分析の応用試論(『国語語彙史の研究11』) 1990・和泉書院